

令和6年度 第8回浄水地域会議 会議録

■日 時 令和6年12月11日（水） 午後7時～午後8時15分

■場 所 浄水交流館 1階 大会議室

■出席者

＜委 員＞	石川 須美子	石崎 里美	勝野 房則
	加藤 耕助	久世 正敏	桑原 正明（副会長）
	佐竹 修（会長）	成瀬 博文	
＜欠 席＞	土田 洋	三浦 律夫	
＜市 長＞	太田 稔彦		
＜事務局＞	能見 秀行（地域振興部 自治推進室長）	杉浦 智文（地域支援課 課長）	
	松下 誠（地域支援課 副課長）	田嶋 優俊（地域支援課 担当長）	
	伴 悠平（地域支援課 主査）		

■次 第

- 1 開会
- 2 会長あいさつ
- 3 市長あいさつ
- 4 提言
 - （1）提言書の授受
 - （2）提言内容の説明
 - （3）質疑応答及び意見交換

■議 事（要約）

- 4 提言
 - （2）提言内容に関する説明
桑原副会長から提言書の内容について説明を行った
 - （3）質疑応答及び意見交換
別紙のとおり

■今後の予定

第9回浄水地域会議は中止

質疑応答及び意見交換の内容

市長	＜提言内容に関する市長の感想＞ 地域活動の捉え方について、豊田市はできるだけ自治区内で完結させようという意識が強い。他の地域では、大きな自治区は元気があり、何でも自分たちで進めている一方で、隣接する小さな自治区は課題を抱えたままとなっている場合もある。その大きな自治区から見ると、小さな自治区の課題を自分の問題として捉えることは少ない。もし、浄水が同じ状況にあるのであれば、若い地域であるこの地域は、提言書に記されている内容に早めに取り組んだ方がよいと思う。区域割の話には合併の可能性も含まれると思うが、既に合併を進めている地域もある。単独の自治区が成り立たないという判断に至った場合、合併する決定がなされることはこれから出てくると考えられる。合併という手法もある一方で、合併せずに連携を取るという選択肢もある。提言書のとおり、最初は連携から始めることになるだろうと予想される。自分たちの自治区だけの利益を追求するようでは、寂しい地域になってしまう。大人たちがそのような区別を作ってしまうと、それは子どもたちにも影響を及ぼす可能性があると思う。 地域団体をコーディネートする仕組みを行政が構築することについては、浄水地域であれば実現可能ではないかと考えるが、どうだろうか。例えば、そのようなコーディネーターに責任を持たせるために、行政が委託するか、あるいは地域の人たちが責任を持って活動できる体制を整えるために税金を投入するかという議論が必要である。その人たちが責任を持って活動をコーディネートし、あとは地域の住民が活動を行うという形であれば、税金をその目的に使うのは妥当である。地域の人々が継続的に関わり続ける仕組みが重要である。 移動支援の取組についてだが、カーシェアリングの仕組みは東日本大震災で車が流され、移動支援が必要になったことをきっかけに始まった取り組みである。豊南地域などですでに実施されているが、提言書に記載されたとおり、制度に配慮しながら進めていただければと思う。 浄水町は新しい町であり、大胆に地域ならではの取り組みを進めることができると感じている。浄水地域の子どもたちを見ていると、このまちが持つポテンシャルを感じるので、積極的に取り組んでいくべきである。
委員	1 つ目のボランティアの話については、市長がおっしゃる通りであり、地域の人々が核となって運営するが、どうしても自分たちの範囲内で活動しようとしてしまうため、行政などの外部の支援が必要だと感じている。そのような支援があれば、地域の支え合いの幅が広がり、自然に活動が進んでいくのではないかと考え、そのための行政の関与を提言に盛り込んだ。
市長	外部の目線は非常に重要であり、内部の人々だけで活動を進めると、「あの人は余計なことをする」「あの人がばかりが目立つ」といった声が出るのが

	ある。こういった場合、外部からの評価を得ることが重要である。昨年、自治区改善取組発表会を開催した際、「自分たちが行っていることが正しいのかどうか分からない」といった声があった。このようなときこそ、多面的に評価を受けることが大切である。浄水地域で行っている活動についても、広く評価を受け、それをフィードバックとして活かすべきだ考える。専門家やアドバイザーが正当性を示す評価が必要であり、その過程を繰り返すことで活動の質が向上していく。
委員	<提言内容以外に関する市長と地域会議の意見交換> 私が子どもの頃、市内の山村部に住んでおり、47 豪雨災害を経て浄水町に引っ越してきた。こども園や小学校の統廃合について、通っていた学校がなくなることは辛いものであり、何か残したいと思っている。分校で育った私としては、分校がなくなるのは寂しいことであり、何かしら形を残してほしいと考えているが、どう思うか。
市長	地域の人々、親の思い、子どもの思いが交錯し、難しい問題である。市長に就任した時、小学校の統廃合基準があり、それを適用する話もあったが、その時にその基準を止めた。地域で将来に向けた計画を立てることができるのであれば、一度様子を見ようということで、約 10 年が経過し、次のステップに進む段階に来ている。当時は地域や親から「学校を残すべきだ」という声が多かったが、最近では親の中でも「学校を残すべきだ」という意見が少なくなってきた。子どもにとっての社会性を身につけるためには、ある程度の規模が必要であり、その規模が確保されないと、子どもにとって不利益になるのではないかという考えが広がっている。慎重に判断すべきであると感じている。
委員	私も山村部出身で、高校はバス通学で本数が少なく、苦労した経験がある。中学 3 年生の時に統廃合があった。今は中学校も 1 つになり子どもの人数も減ってきており、心配である。
市長	今、山間部の旭と市街地の朝日丘では、交流館のイベントを通じて交流が行われており、浄水地域でも何か交流を進めることができればと思う。
委員	子どもが小学生で、体育館に空調が設置されたことにとっても喜んでいる。子どもたちは近くにアミューズメント施設があればよいと言っているが、どう思うか。
市長	豊田市は中学校区が 28 地区あるが、浄水以外の地域でも同じようにそういう施設がほしいと言われる。中核市の幸福度ランキングというのがあるが、豊田市は中核市の中で 1 位である。この話をするときよく実感がないと言われる。話が少しかわるが、浄水中学校で子どもたちと意見交換をした

	ことがある。子どもたちに家から学校までの道すがらで、雑草に遭遇せずに、学校に着ける子はいるか？と質問したら半数くらい手が上がった。そのときに山村地域とどちらがいいのかと思った。いろいろなところで話しているが、光触媒を発見された名誉市民の藤嶋昭先生と話したときに「藤嶋先生が小学生のころに住んでいらっしゃった足助の6年間はどうか？」と質問したら、「何もなかった」と笑って答えられた。蛍の数を数えたり、雲の流れをみて天気を予測したりしたことが科学者になった自分につながっているとおっしゃっていた。「雑草という草はない」という言葉を残された牧野富太郎先生は、通学の道すがら、毎日ひとつ雑草の名前を覚えるだけで人生ものすごく充実するという話をされた。便利になれば暮らしが快適になると私たちは思っているが、便利な暮らしが決して快適な暮らしにつながるのではないと思う。快適な生活空間も程々がよいのかもしれない。
委員	豊田市は市街地と山村部がうまくバランスをとり、遊び場が豊富であり、私はその点で素晴らしい町だと感じている。地区コミュニティ会議に参加しているため、地域でどのような活動が行われているかを知ることができ、私のように地域活動に触れることで、助け合いの精神が広がっていくのではないかと考えている。
市長	市民意識調査の結果でも、地域活動への参加率は低いですが、もっと地域活動に気づき、参加することが重要であると感じている。
委員	認知症の方や一人暮らしの高齢者が増えており、民生委員は大変な思いをしている。民生委員の担い手が増えるとよいと思っているが、お考えはあるか？
市長	これまで民生委員が担ってきた役割は、今後もそのまま民生委員に押しつけるのではなく、地域全体でシェアしていくべきであると考え。認知症の方への支援も、地域社会で協力し合い、シェアすることが大切である。
委員	区長としての任期が約9ヶ月経過したが、その間、本当に大変であると感じている。区長が担っている業務について住民に理解してもらおうと回覧板を回しているが、依然としてその大変さが十分に伝わらず、次の区長が決まらないという状況が続いている。工事申請などの通常業務については、電子申請の導入により負担が軽減されたが、区長会などの会合に出席しながら業務をこなすことは非常に大変である。大変さを理解してもらうことは重要であるが、それと同時に区長としての楽しさややりがいも伝えられるよう、発信していきたいと考えている。
市長	地域社会において各人が何らかの役割を担うことは、自分自身の健康にも

委員	良い影響を与え、地域の活力にもつながる。このような議論は、今後さらに柔軟に進めるべきである。 今後、さまざまな方向性を持って議論を進めていく必要がある。今日、提言書を市長に提出したが、これはあくまで一步に過ぎない。継続的に議論すべき課題は多く、自治区の区域割も含めて、住民と協議し、抱えている課題を解決していかなければならない。これからが重要な時期であると感じており、引き続き議論を進め、より良い方向へ進めていきたいと考えている。
----	---